「ピースが合わさる」

民数記２：１－３４

October.15.2023

民数記２：１－３４（パワポ）

Preface

今朝は、いつものエペソ書から離れまして、今読みました民数記２章から私の証のようなメッセージをさせて頂こうと思っております。

民数記と言いますと、レビ記に次いで、「読みにくい聖書」というイメージがあるかも知れません。

私も２７年程前、初めて聖書通読に挑んだ時、まあ当然ながら、出エジプト記の後半部分から突如として読みにくくなり、レビ記に入って急ブレーキが掛かりました。

はっきり言って、訳が分かりませんでした。

「何でこんな苦行のような読書をしなければならないのだろうか？！」、「神さま、もうちょっと読みやすく、分かりやすく書けなかったんでしょうか？」と不満の気持ちが湧き上がり、結局、レビ記の途中で創世記から始めた聖書通読を辞めてしまいました。

そんなことを何度か繰り返しているうちに神学校へと導かれて行き、神学校での授業を聞きながら聖書通読をしますと、レビ記や民数記が、やっとこさ何となく読めるようになっていきました。

でも、ただ読めただけ、読んだだけであり、その内容が心の奥底にストンと落ちるようなことはありませんでした。

字面だけ、神学的にとても重要な内容が書いてある、主イエス・キリストの十字架の贖いを旧約聖書学的に理解する上でとても重要な内容が書いてあるという**情報**としての認識は出来ましたが、なんかこう私自身の信仰的成長や成熟のために直接役に立っているとか、「ああ、分かった！」という心が喜ぶような理解と言いましょうか、感動と言いましょうか、そういうものはありませんでした。

ではいつ、レビ記や民数記などの難解に思える聖書箇所が、「ああ、分かった！ ああ、凄い！　ああ、これは僕にとってなくてはならない宝のような御言葉だ、救いだ、霊的知識だ！」というような思いに至ったかと言いますと、１９年前土浦めぐみ教会の青年主事となってから始めた早天祈祷会での学びとメッセージ奉仕を通してでした。

私にとって早天祈祷会の毎朝の奉仕は、信仰的ばかりか、人生の大きな転機となりました。

日曜日を除く毎朝４５分ぐらいの聖書からのメッセージをしなければなりませんでしたので、それなりのメッセージ準備をしなければなりませんでした。

なぜか日曜礼拝のメッセージ準備は、１９年前から今も変わらずとても苦しい作業なのですが、早天祈祷会のためのメッセージ準備とメッセージ奉仕は全然苦にならず、体力的にきついことはあっても、以前も今も楽しいだけなんです。

で、ある意味、強制的に神様から強いられた早天祈祷会のメッセージ準備とメッセージ奉仕を通して、出エジプト記の後半部分からレビ記、民数記という書簡がとても楽しく物凄い内容が込められている神の愛だということが、実感がこもって少しづつ分かるようになっていきました。

Part One

そして今、私個人的に、民数記をゆっくり読み進めているのですが、月報めぐみ１０月号の巻頭言にも少し書きましたように、民数記の１章から楽しくて仕方がないんです。

以前は、何の気なしにただ漠然と読み進めていた箇所が、いちいち目に留まり、その内容の深さ、濃さ、緻密さ、神の御手、神のご計画、神の導き、神の意図が感じられ、その御言葉に関連する他の聖書箇所が頭に思い浮かんできて、その思い浮かんだ聖書箇所をいちいち開かずにはおられず、開いてはその結びつきに感動し、意味に感動し、神さまが抱いておられる大きな絵に感動せずにはいられないんです。

以前は見えなかったものが、見えるようになっていることにびっくりします。

良く分からないただの名前の羅列や数字の羅列だったものが、いちいちありがたい神の言葉として迫ってくるんです。

見えなかった聖書の御言葉が見えるようになっていること、聖書が前よりも見えるようになっている自分自身にも驚きます。

そして、感動するんです。

以前の私には、取っ散らかっていて、合わさってもおらず、そこにどんな神さまの絵が、意図が隠れていて完成するのかが全く見えていなかった聖書の御言葉のピースが、頭の中だけでなく、心の中でも合わさっていき、絵の輪郭が見えて来て、感動が押し寄せて来るんです。

「ああ、確かに時間がただ過ぎ去っているのではなく、神の御手が僕の上にあるし、神のご計画と導きが日々の暮らしの中にある。そして、ただあるだけでなく、聖書の御言葉とともにあり、聖書を生かされている」という物凄い感動が、押し寄せて来るんです。

こう大きな宝箱の中に、金銀財宝宝石などがザックザクあって、それを手でこう持ち上げているかのような絵まで頭の中に思い浮かびながら、聖書の御言葉が宝そのもののように感じるんです。

本当にただ感動ですね。

Part Three

例えば、今日の聖書箇所民数記２章を読んだ時、大きな絵が頭の中に思い浮かびました。
それは、ヨハネの黙示録７章に描かれている天の御国の礼拝の様子です。

父なる神と子羊イエスを中心にして、その周りを取り囲むかのようにいるすべての被造世界の霊的統治を任されている四つの不思議な生き物と御使いたち、そして、イスラエル１２部族を始めとするキリストを信じる無数の霊的イスラエル・神の民たちが、真ん中におられる父なる神と子羊イエスに感謝と賛美と礼拝をささげている様子が頭の中に思い浮かびました。

ヨハネの黙示録７：４－１７（パワポ）

民数記２章の、モーセを通して神から与えられた御言葉が刻まれた２枚の石板が収められている契約の箱を据えた幕屋を中心にして、１２部族がその周りを取り囲むように宿営している様子が、このヨハネの黙示録の天の御国の父なる神・子羊イエスを中心にして誰にも数えきれないぐらいの大勢の群衆が、子羊イエスの血によってその衣を白くされた神の民たちが取り囲み礼拝している様子と、私の中で重なりました。

しかもヨハネの黙示録７章では、イエス様のことを「主イエス」とか、「御子イエス」とは言わずに、「子羊イエス」と言っていることにも、民数記２章の幕屋に通じるものがあります。
幕屋の奥まったところに、先程言いましたように、神の言葉が刻まれている２枚の石板が収められているだけでなく、幕屋におけるもう一つ重要な役割は、罪の赦し・罪の贖いのための家畜を屠り献げるという礼拝儀式が行われていたことですが、その罪の身代わりに献げられていた家畜のように、私たち人類一人ひとりの人間の罪のために、一切傷のない罪のない主イエス様が子羊として十字架に架けられ、屠られ、殺され、その贖いをもって、私たち人間に神の救いが示されたということ。
正に、

ヘブル９：１２，２６（パワポ）
雄やぎや子羊の血によってではなく、キリストはご自分の血によって、ただ一度だけ聖所（霊的幕屋）に入り、罪を取り除く贖いを成し遂げられた。

という御言葉にある通りのことをイエス様がなさったので、黙示録では、「主イエス」とか、「御子イエス」とは言わずに、「子羊イエス」と言っているわけですね。
そして、この黙示録７章の天の御国の礼拝の様子、民数記２章の幕屋を取り囲んでいるイスラエル民族の様子両方ともに、神の豊かなあらわれ、ご臨在があります。

神の民たちを喜び、慰め、励まし、導き、力を与え、飢えることも、渇くことも、どんな炎熱も彼らを襲うことは出来ず、その涙をことごとくぬぐい取って下さる神のご臨在が豊かにあります。

Part Four

さらには、黙示録７章に出て来るイスラエル１２部族の名前の羅列も、民数記２章に出て来るイスラエル１２部族の羅列も、その先頭に出て来るのは、「ユダ部族だ」ということを発見します。

２７年前初めて民数記を読んだ時には、ユダ族だろうが、ルベン族だろうが、ベニヤミン族だろうが、無知な私にとっては全部一緒です。

全部全く見当もつかなければ、その違いも分かりません。

全部同じようなただの名前の羅列で、訳の分からない誰かの名前で、その一人一人の名前が誰を指し、どんな人たちだったのかなんてということは全然分かりませんでした。

でも、今は分かります。

今はその違いが、少しですが分かるようにされました。

その名前の羅列に、順番に、神さまの大きな意図と意味とご計画と絵が表されていることが見えるようにされました。

本来、イスラエル１２部族・１２兄弟の長男はルベンなので、年齢順、生まれてきた順番に並べるならば、ルベンが、ルベン族が一番最初に来なければなりません。

なのに、四男のユダが、ユダ部族があたかも長男のように、名前の羅列の一番最初に出てきます。

なぜならば、創世記を見ますと、長男ルベンは、家族として決してそんなことは起こしてはならない近親相姦の罪を犯してしまったがために、神さまから、「あなたは長男としての資格がない」と宣言されてしまい、霊的系図を担うことが出来なくなってしまいました。

その代わりに、四男のユダが長子のように扱われることとなりました。

なぜユダが長子のように扱われるようになったのかの理由は、具体的には記されておりません。

私たちの救いと同じように、ただ神の恵みによる選びでした。

そして何よりも、このユダの血筋から、メシヤ主イエスがお生まれになるのです。

なので、ヨハネの黙示録７章のイスラエル民族の名前の順番においても、ユダ族が一番最初に登場し、民数記２章の名前の順番においてもユダ族が一番最初に出てきます。

ユダ部族は、幕屋を中心にして、東側に陣取って宿営をするように神さまから命じられ、またイスラエル民族が宿営しているその場を出発する時には、「必ず

ユダ族が先頭を切って行かなければならない」と命じられています。
　つまり、ユダこそが筆頭だということであり、ユダが筆頭だということは、ユダ族からお生まれになるイエス・キリストは、天地万物の筆頭なるお方であるということを表すわけです。

　そればかりか、明けの明星のように、暗闇を打ち破る太陽のように、この地上に光としてお生まれなさるということまで、「ユダ族が東側に陣取る」ということに表現されています。
　民数記２章をもう一度見てみます。

民数記２：１－３（パワポ）

　幕屋を中心に宿営をするよう神から命じられたイスラエル１２部族の筆頭はユダ族です。
　そして、ここの箇所で注目すべき点は、３節の「東側に宿営する」ということですが、残念ながら、日本語の聖書には訳されていない言葉が、この「東側」という言葉には含まれています。
　言語を直訳しますと、「日の昇る東側」となっています。

　「日が昇る」というのは、一日の始まりであり、暗闇を打ち破ることであり、この地球上に存在するすべての生けるものに力と養分を与える光の登場を表します。
　つまり、ユダ族が日の昇る東側に陣取るというのは、世の光、すべての物事の始まり、始祖、まことの力、権威、威光であられる主イエスが十字架上で罪の赦しという救いを成し遂げたことのみならず、天に昇られ、再びこの地に再臨され、天地の全てを統治されるという大きな大きな神のご計画を念頭に置いた配置であるということです。
　物凄い大きな絵です。
　主イエス様が「光」であり、力であり、「物事の始まり、始祖」であられることが、ここ民数記２章に、宝が隠されているかのように記されているということですね。

　ヨハネの黙示録のイエス様についての描写を見てみます。
　（“人のような方”とは、イエス様のことです）

ヨハネの福音書１：１３－１８（パワポ）
ヨハネの黙示録２１：２２－２３（パワポ）
ヨハネの黙示録２２：１２－１３（パワポ）

　主イエス・キリストは、光であられ、最初であられ、物事を終わらせる創造主なるお方であられるにもかかわらず、私たち人間一人一人を愛して止まない、そ

の愛ゆえに罪のいけにえの子羊となられた子羊なる神です。

## Part Five

２７年前の私には、民数記という一見すると面白くも何ともない聖書から、神の意図や御旨を見出すことなんか一切出来ませんでした。
ユダが誰なのかも、どんな意味なのかも分かりませんでした。
イエス様が光であられ、力であられ、物事の始祖であられるということを、ユダという名前を通して表しているなんてことは知る由もありませんでした。

でも、２７年経って民数記２章を見た時、そういうことが見えるようになっていました。
御言葉の断片が、何の意味もないただのかけらのような御言葉が、大きな神様のご計画であり、ご意思であり、さらに私の内側でも大きな意味となって迫って来、私の人生を変えるような重大事項であったということが見えて来るようになりました。

そして、この聖書の御言葉が見えて来るようになったということから、私自身の人生におけるピースが、断片が、かけらが、日々の苦しい時間が、楽しい時間が、合わさっていくような感覚にもなりました。
「ああ、僕の人生は確かに神さまの御手の中にあるし、進んでいるし、守られているし、意味があるし、神が定めて下さっているそのゴールに向かって導かれている」と、事新たに確信出来ました。
ちょっとづつ、ちょっとづつ、神さまが用意して下さっている人生のピースが合わさって行っていることを感じました。

「僕という人間が、果たして土浦めぐみ教会の主任牧師をやっていていいのだろうか、もっと相応しい人がいるんじゃないだろうか、もっと僕にとって相応しい道、楽な道、反れていい道があるんじゃないだろうか…」という思いを、この民数記２章を読んで綺麗に一掃されていくような感覚を私の内側で感じました。
聖書の御言葉を生きるということを、聖書の御言葉の中に人生丸ごと入れらているいうことを、「人間の人生、この聖書の御言葉から外れて、逸脱してなされることは一切なく、すべてがこの神の言葉である聖書の中で始まり、聖書の中で進み、聖書の中で完結する」ということを、民数記２章を読んで体いっぱいに感じました。

## Conclusion

私たちの人生のパズルは、神の言葉の内にあって、合わさっていくものです。

人生において何が辛いって、自分の人生の意味を見出せない、解釈できないこと程辛いことはありません。
どんなに苦しくても、どんなに納得が行かないところを通ったとしても、そこ

に意図を見出せるならば、解釈が与えられるならば、納得がいきます。

　そして、日々暮らしの、人生の断片断片に大きな神の絵が隠されていることを、神とともに歩むならば、イエス・キリスト様とともに歩むならば発見するようになることでしょう。
　その数多くの断片が、素晴らしい絵となって表されていくことを体験させられていくことでしょう。
　そして最終的に、復活を頂くのです。
　だから使徒パウロは、イエス・キリストについてこんな風に言い表しています。

　コロサイ人への手紙２：２－６（パワポ）

　キリストにあって歩みましょう。
　キリストの御言葉を蓄えましょう。
　キリストの御言葉を生きましょう。
　知恵と知識の宝がすべて隠されているキリストに留まり続けましょう。

　そして、その宝を味わい尽くすのです。

　お祈りいたします。

　祝祷：コロサイ書２：６